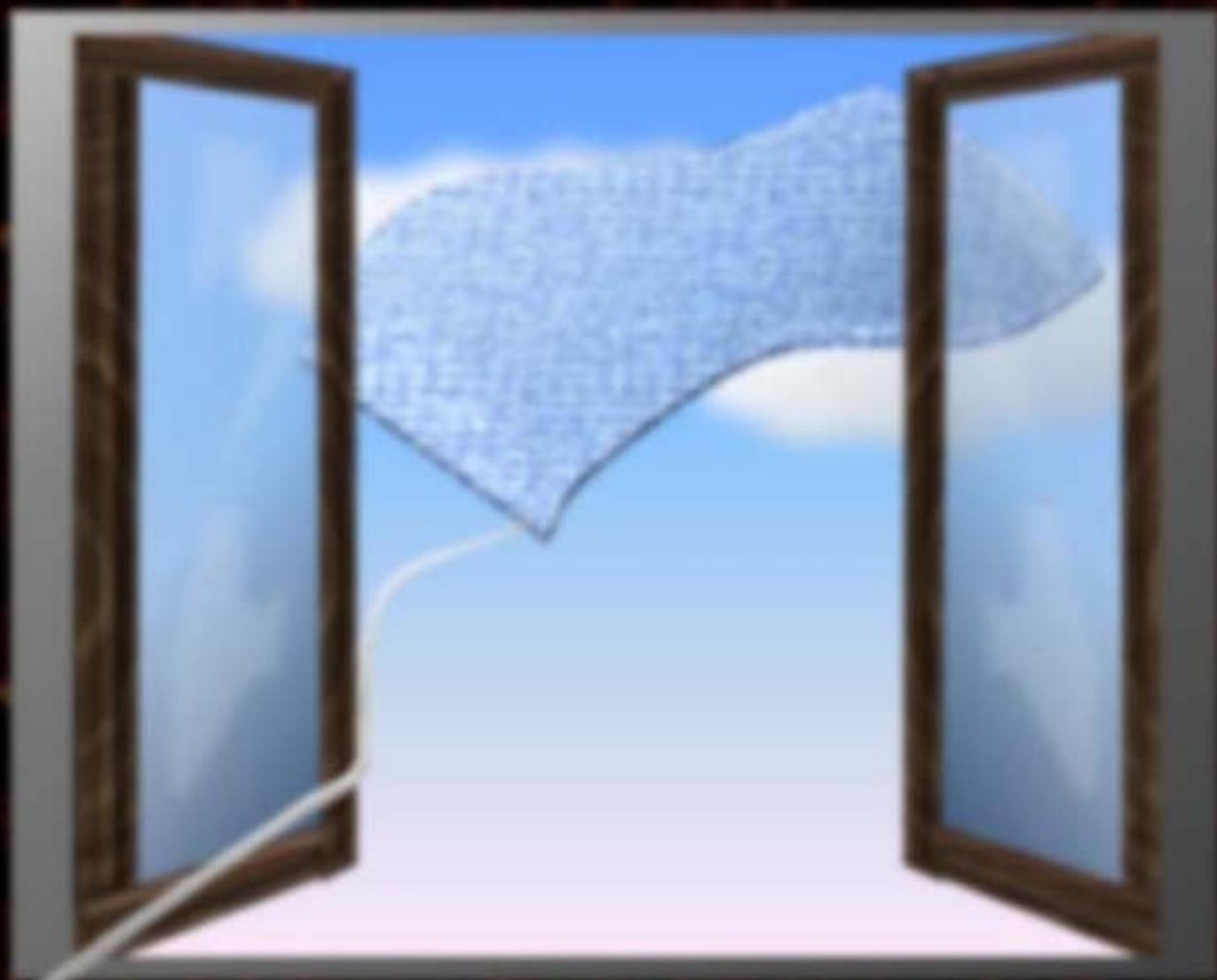


週刊

夢の窓

No.8



むうにい

わたしは小学生だった。

始業のチャイムが鳴ったので、席に着いて先生が来るのを待つ。

けれど、先生の代わりに、図体のでかいトロールが入ってきた。

「わりいけんど、センセは来ねえど。おれっち、食っちまったからなっ」

トロールは馬鹿でかい声でがなった。教室中がびりびりと揺れる。

あちこちの席でざわざわと騒ぎ始める。

「ギッチョン、食われちまったってよ」

「あのギッチョンがねえ……」

ギッチョンとは担任の片桐義之先生のことだ。何かというと、すぐ癩癩を起こし、男にしては甲高い声でわめき散らす。その様子が、まるでスイーチョンと鳴く虫にそっくりなのと、名前が「カタギリ」なので、「ギ」を取って、「ギッチョン」とあだ名されていた。

「ざまーねえな、ギッチョンの奴っ」男子の1人が憎まれ口を叩く。

「よしなさいよ、食べられちゃった人のことを悪く言うのは」委員長の女子がたしなめる。

「あーっ、委員長はギッチョンにホレてたんだなっ。ラブラブうっ、ラブラブうっ！ 委員長とギッチョンはラブラブうっ！」

委員長は顔をまっ赤にして、

「ばっかじゃないの？ 誰があんなインケン・メガネなんかっ！」

トロールがダンッと教壇を叩いた。教壇はペしゃんこに潰れてしまう。

「しずかに、しねがあっ！」窓ガラスが1枚残らず、ぱーんっと割れた。「おめらのタンニンはもう、いねんだどっ。だども、ベンキョはでえじだな。そんぐれえ、おれっちにもわかるっ。だからよ、今日はおれっちがセンセをすどおっ！」

生徒たちから一斉に歓声が上がった。少なくとも、ギッチョンの授業より100倍は面白そうだ。

「おれっちはシャカイカもサンスウもできねえ。だから、外でベンキョすることにすんどっ」

そう言うなり廊下へ出て、どっこいしょと教室の壁を押した。

めりめりっと音を立てて、教室は校舎の外に押し出される。

クラス中がまた、わあーっと楽しそうな声で包まれた。

半分ばかり突き出た教室を、トロールはぽんと蹴飛ばす。タンスの引き出しのように、教室は校舎から飛び出して行って、校庭の真ん中にすどん、と落ちた。

「今の、ちょっとだけスリルあったね」

「うんうん。股の付け根が、きゅんっとしちゃった」

トロールも、今さっき教室があった隙間から、校庭にどっすんと飛び下りる。蹴り出された教室ごと

、全員が跳ね上がった。

「すげーっ。家の前をダンプが走っても、こんなには揺れねえぞ」

「体重、100キロじゃきかないよね。どれくらいあるんだろう」

「せんせー、体重、何キロあるんですかー？」

トロールは空を仰いでうーんと考え込んでいたが、「そだな、ガキンときに1度はかったっぎりだけんど」と前置きをした上で、指を3本並べて見せた。

「300キローっ?!」わたしたちはそろって声を上げた。けれど、トロールは首を横にふって、「ちがう、ちがうっ。そこさゼロをもう1つ、つけてくれな。だども、あれからもう400年ばかりたってっから、今はもっとふえてっどおっ」

女子も男子も、驚嘆と尊敬の眼差しで「トロール先生」を見上げる。小学生にとって、大きいもの、重いもの、強いものは、いつの時代でも憧れの対象なのだ。この新しい先生には、その全てがそろっていた。

「せんせーっ」

「トロールせんせーっ」

わたしたちはどっと駆け寄り、先生を取り巻いてしまう。トロールは少し照れながら言う。

「さあっ、走れ走れーっ。遊べ遊べーっ！ おれっちはおめらの味方だかな。悪い大人は、センセだろがダイジンだろが、おれっちが食っちゃうからよおっ！」

恐怖映画いきなり放映される

深夜、退屈なバラエティ番組を観ていると、突然画面が変わり、映画評論家が登場した。

「はい、突然ですが、臨時映画が始まります。びっくりですねえ、驚きましたねえ」評論家が解説を始める。

映画のタイトルは「恐怖のゼリー」。

幼稚園児くらいの男の子と女の子が、母の日のプレゼントとして、内緒でデザート作りをしている。ミルクたっぷりのゼリーだ。

ところが、原材料のゼラチン、実は宇宙から飛来した未知の細菌に感染していたのである。出来上がったゼリーは、冷蔵庫の中で見る見る膨れあがっていき、ついには溢れ出てしまう。

そんなこととは知らない家族は、のんきにテレビを観たり、ゲームをしている。

異変に気がついたのは母親だった。

「何かしらね？ キッチンでゴボゴボと音がするわ」

彼女がそこで見たのは、部屋いっぱいのゼリー。ぶよぶよ、ぐつぐつと、成長し続けている。

思わず悲鳴を上げようとするが、その口めがけてどっと流れ込む。

「さっきからママが戻ってこないんだけど、どうしたんだろうね？」父親が気にし始める。

「知らなーい」2人は口をそろえて答えた。

「パパ、ちょっと見てくるよ。なんだか、胸騒ぎがするんだ」

様子を見に来た父親を待っていたのは、ゼリーの襲撃だった。抵抗をする間もなく、ゼリーの塊に飲まれていった。

ゼリーの怪物はどんどん大きくなって、とうとう、子供達のいる居間へと侵入してくる。

2人の座っているソファの足許に、何かぶるんとしたものが染み出してきた。

「何だろう、これ」男の子が指ですくってみる。ほのかに甘い香りがした。

「あっ、これって、昼間作っていたゼリーじゃない？ 大変っ、冷蔵庫から漏れてきたんだわっ！」

振り返ると、そこにはまるで、高波のような押し寄せるゼリーが！

家の中は、すっかりゼリーで満たされてしまった。

いったん、CMが入る。

「こ、怖いなあ、ゼリー……」わたしは胸をバクバクさせながら観ていた。もう、ゼリーは食べられないだろうな、と思った。割りと好きな食べ物だったので、残念でならない。寒天ならどうだろう？

ゼリーと違って、植物性だから大丈夫じゃないかな。

再び映画が始まった。画面には「それから数週間後……」というテロップが流れる。

家は隅々まできれいに洗い流され、すっかり片付いていた。

「行って来まーすっ」子供達が元気にドアから出ていく。通学時間だった。

「気をつけてねーっ」母親が見送る。「あなたー、早くしないと会社に遅れるわよ」

奥から父親の声が返ってくる。「なあ、クルマのキーはどこだっけ？ ああ、あったあった。他に忘れ物は……」

この間あんな出来事があったとは思えない、ごく日常的な風景である。

その時、妻の叫び声が閑静な住宅街に響いた。

「あなた、危ないっ！」

クルマに乗り込もうとした彼を、猛スピードで走ってくる別のクルマがはね飛ばしてしまう。

妻は、やれやれというように首を振る。急いで家に戻ると、ホウキとちりとり、それにバケツを持って現れた。

粉々に砕け散った夫を掃き集めながら、こう洩らす。

「練り固めて、一晩、冷やさなくちゃ。あれ以来、わたしたちはゼリー人間になってしまったの。切られても撃たれても、決して死ぬことはないんだけど……」

再び、映画評論家のすました顔が映し出される。

「はい、どうでした？ 怖かったですねえ、怖ろしかったですねえ。これが恐怖映画なんですねえ、超一流の恐怖映画。はい、素晴らしいですねえ……。それではまた、お会いしましょうね。ばいばい、ばいばい、ばいばいきんぎょ」

真夜中のアーケード

真夜中のアーケード街は、降りたシャッターがどこまでも続く。人1人見当たらず、ひっそりと静かだ。

ラーメン屋の前には貼り紙がしてあった。

〔過激派が立てこもり、今日に至る〕

すると、まだ事件は解決していないのだろうか。店の2階は暗く、今頃は犯人達が寝息を立てているのかもしれない。

八百屋の軒下には、カボチャがぽつんと置かれている。店を閉める時に、しまい忘れてたらしい。

ぽーんと蹴ったらさぞかし愉快だろう、そう思った。けれど、閉め出され、忘れられてしまったカボチャにはなんの罪もない。

わたしはカボチャを拾い上げ、八百屋のポストに無理やりねじ込んでおいた。

オモチャ屋は、シャッターいっぱい絵が描かれている。店が終わった後でも演出を忘れないあたり、さすがは夢を売る商売だなあと感心した。

青や赤を基調に、どこかで見たようなキャラクターや、あからさまに模倣された登場人物たちが縦横無尽に跳ね回っている。

中でも目に付くのが、中央で取っ組み合いをする、2体のロボットだった。片方は首がもげ掛かっていて、どう見ても形勢が不利である。

閉まったシャッターが並ぶ中、一箇所だけ、岩をくり抜いた竪穴式住居があった。奥からはこんもりと明かりが漏れている。

なんの店だろうとのぞいてみると、階段が地下へと続いていた。中華料理のような、いい匂いが漂ってくる。

「そういえばお腹が空いたな……」わたしは腹をさすりながら、降りていった。

「あ〜ら、いらっしゃい」鼻の下やあごに青いひげ剃り跡を残したママが、人懐こく声を掛けてくる。

オカマ・バーだった。

「何か食べるものありますか？」わたしは尋ねた。

「もちろんよ〜。はい、メニュー。ここから好きなものを頼んでちょうだい」

メニューを受け取り、どれにしようかとページをめくっていく。

「下水で獲れたミミズ炒め」という料理の写真は、チンジャオロースーそっくりで、見るからにおいしそうだった。ただ、「下水で獲れた」という語句が気になって、躊躇する。

他に「白ネズミのごま和え」、「ワニガメのスープ」、「謎のほ乳類の蒸し焼き」など、写真はとも

かく、名前からどうしても先入観を持ってしまう。

最後の方のページに、店のお勧めが載っていた。魚介をふんだんに使ったペスカトーレだ。

「あ、このパスタがおいしそう。これにしよう」わたしは注文した。

「わかったわ、ちょっとだけ時間がかかるけど、待っていてちょうだいね～」ママは厨房へ入った。

ところで、何ていう料理だったかな。もう1度よく見てみる。

どぶ底ムール貝と腐海のディスカスを使ったゴルゴンゾーラのパスタ」

それが料理の名前だった。

都電に乗って

ベンチに座って、三ノ輪方面の都電が来るのを待つ。

ほどなくしてやって来たが、方向幕には行き先ではなく、「はずれ」と表示されていた。

「ちっ、この電車じゃダメだ」先に来て待っていた男が、そう舌打ちをする。

そうか、この電車は「はずれ」なんだな。うっかり、乗らなくて正解だった。

次の電車も「はずれ」だった。

「また、『はずれ』でしたね」わたしは男に声を掛ける。

「ええ、残念です。かれこれ、8時間も待ってるんですけどねえ」男はため息をついた。

「そんなに？　じゃあ、始発からずっとですね。『あたり』はやって来るんでしょうか？」

「3丁目の小島さん、あの人は先月、あたりを引きましたよ。いやあ、運が良かったんですな。その日はたまたま靴下を左右、はき違えたんだそうですよ。そういう細かいことが気になるたちらしく、家に戻ってはき直してきたんですが、その時に来たのが『あたり』だったんですよ」

「あたり」の電車はそんなにも来ないものなのか。それならば、いつまでも待っていたって仕方がない。次の電車が来たら、はずれだろうが何だろうが、もう乗ってしまおう。

わたしはそう決心した。

遠くのカーブに都電が見えてきた。

「さてさて、次はどうですかね」男が首を伸ばして見つめる。

都電がだんだんと近づいてくる。わたしたちは、方向幕に熱い視線を注いだ。

赤い字で「大あたり」と表示されている。

「あっ、『あたり』ですよ。それも『大あたり』　！」わたしは思わず大声で叫んでしまった。

「おお……」男は感激のあまり、言葉も出ないらしかった。

「良かったですね。朝から待った甲斐があったじゃないですか」わたしは心から男をねぎらった。

わたし達は都電に乗り込んだ。がらがらだったので、空いている席に並んで座る。

「『あたり』の電車に乗ると、何かもらえたりするんですか？」わたしは尋ねた。

「降りるときに証明書を発行してもらえるんですが、これがあなた、なかなかのものでして」男はいささか、興奮気味に話す。「会社に提示すれば、賞与にプラス査定となります。商店街で使えば、割引券にもなりますしね」

「へえ、それはいいですね」わたしはうなずいた。

「今日は宝くじなど買ってみようかと思います」男は言う。

「運が付いているうちに、というわけですね」

「はい。普段は買わないんですがね。何だか、当たりそうな気がするんです」

「きっと当たりますよ。当たるといいですね」そう返しながら、自分も試しに何枚か、買っておこうか

と考えた。確かに運気が上がっているのがわかる。1等とは言わなくとも、お小遣い程度には勝てる気がした。

男は、町屋で下車ボタンを押した。

「それじゃわたしはここで。あなたにも幸運が訪れるといいですね」

「ありがとうございます。期待などせず、気楽に待ってみます」軽く会釈をして、男を見送る。

さて、終点の三ノ輪に着くまで、少しだけうたた寝でもしようかな。「あたり」の証明書をもたらしたら、評判のコロッケを割引価格で買って食べよう。

最高においしいんだよな、あそこの肉屋。

友達と口論になる

友人の中谷美枝子とファミレスに入る。

「あ、あたし、デミグラ・ハンバーグのセットねっ」中谷が店員に注文をする。割り流されやすいわたしも、「じゃあ、それをもう1つ」と言い添えた。

「デミグラ・ハンバーグ・セットをお2つですね。かしこまりました」店員は注文票に記入して戻っていく。

「あんたってば、ほんと、いつも人の真似ばかりするよね」中谷は冗談めかしてそう言ったが、今日に限ってなぜだか、カチンと来た。

「真似なんかしてないよ。食べようと思ったものが、たまたま同じだっただけだっ」

「うそっ。それ、絶対うそ。だって、あたしが頼むまで、ずっとメニュー見てたじゃない。あたしが、デミグラ・ハンバーグって言ってから、あ、じゃあ、それにしよう、って思ったに決まってる」

鋭い。だから幼なじみはやっかいだ。

「もう、いいじゃん、そんなことどうだって」口論では勝てない気がして、わたしは引き下がることにした。

「ほら、すぐそう。負けそうになると、いつもそうやって――」

「もう、うるさいなあっ」わたしは声を荒げた。

「何さ、未だにニンジンも食べられないくせにっ」中谷はさらにわたしの弱点を突いてくる。

「ニンジンを食べなくたって、誰にも迷惑なんかかけてないでしょ？ それとも、中谷は困るってわけ？」

中谷はむっと口をとんがらせた。

「ニンジンだけお皿に残して、まるでお子ちゃまじゃない。そんなお子ちゃまなんかと一緒にだと思われのが、恥ずかしいっ言ってるの！」

「お子ちゃまって言ったねっ」わたしは頭に血が昇ってしまった。「それならこっちも言わせてもらうけど、今着ているそのレプシムのカットソー、ぜんっぜん、似合っていないよっ」

すると、中谷はテーブルをドンツと叩いて立ち上がった。そのままわたしの席へ来ると、肩をつかんで、ぐわん、ぐわんと揺さぶる。

「ほんと、むかつくっ。あんた生意気だよっ！」

次の瞬間、わたしはバランスを崩して、イスごと後ろに倒れこんだ。

「痛っ……」その後の言葉が途切れてしまう。ごろん、ごろんと転げ回る光景の中、首がもげてばたばたともがいている、自分の姿を捉えた。

（えっ、なんでっ?!）それが、真っ先に頭に浮かんだ疑問だった。

床から、目だけをきょろきょろさせてうかがうと、後ろの席で別の客が、ステーキ・ナイフを手に、ギョツとした顔をこちらへ向けている。ナイフは真っ赤に染まっていた。

そうか、タイミング良く、ステーキ・ナイフで……。

店内は騒然となった。中谷もびっくりしたように駆けてきて、わたしの首を拾い上げる。

「ごめんね、ごめんね。どうしようっ、どうしよう！」

不思議と意識ははっきりしている。何か言葉をかけようと口を開くが、声がまったく出ない。仕方がないので、べーっと舌を出して見せた。

「あんたってば、こんなときに……」中谷は呆れたようにわたしを見つめる。

「お客様の中で、医者はいませんかあーっ」店員たちが口々に叫ぶ。

窓際に座っていた初老の男がすっと立ち、

「わたしはもぐりの医者だが」と前置きをした上で名乗り出る。

「この際、贅沢は言ってもらえません。あちらのお客様の首がぼろりともげてしまいまして、診てもらえませんでしょうか？」

「うむ、わかりました。では、さっそく――」

医者は、わたしの頭をひっくり返したり、振ったりして調べ始める。

「中身はたいして詰まってませんな。切断面はきれいにスッパリと……。いやはや、ステーキでも切るように、うまいことってますぞ。まあ、これなら大丈夫でしょう」

そう診断すると、針と糸、それから飯粒を持ってくるよう、店員に頼んだ。

胴体を起こすと、その切り口に、たっぷりと飯粒を盛り付け、こてこてとならしていく。

そこにわたしの頭をぽんっと載つけた。

「じっとしておるように」と医者が注意をする。「ちょっとでも動くと、ずれてしまうでな。喉を鳴らすのもダメだ。いいね？」

針と糸で、ちくちくと縫っていく。時間を掛けて、ゆっくりと。わたしはその間、身じろぎもせず待っていた。

「よしよし、終わった。1週間は、激しい運動は控えるように」と医者。

「あ〜あ〜っ、やっと声が出るようになった。ありがとうございます、先生」

ちょうど、わたしたちの「デミグラ・ハンバーグ」がやってきた。

「どうなるかと、心配しちゃった」そう中谷が言った。「でも、よかった。これで、ちゃんと食事ができるわね」

「うん、ここのハンバーグ、ほんと、おいしいもんね。食べ損ねたらがっかりしちゃうよ」

あとで鏡を見て驚いた。縫い糸に「茶」を使っていたのだ。赤でも黒でもなく、茶とは！

「食べている間、中谷が笑いをこらえていたのは、こういうわけだったのかあ」

わたしは、急に恥ずかしくてたまらなくなった。

義賊が新宿で大暴れ

世間では「ハムスター小僧」の話題で持ち切りだった。「現代版ネズミ小僧」などと呼ばれ、金持ちから金品を奪い、それを低所得者に分け与える、という噂である。

わたしと桑田孝夫は、新宿の喫茶店でチキン・バスケットをつまんでいた。「そんなのがいたら、おれもおすそ分けが欲しいもんだ」桑田はチキンにレモンを搾りながら言った。「実在はするらしいよ。ついこの間も、練馬の方で宝石店が襲われたっていうじゃない」わたしは、2、3日前に見たテレビ・ニュースを引き合いに出した。「だとしてもよ、しょせんは悪党なんだろ？ 盗んだ金なんて、どうせ自分で使っちゃうに決まってる」

パトカーのサイレンが鳴り響き、表がなにやら騒がしくなった。「何があった？ 事件か、それとも事故か！」桑田は窓に顔を貼りつけるようにして、外の様子をうかがう。

客の1人が、ケイタイのワンセグを見て声を上げる。「うおっ！ おい、見ろ。例のハムスター小僧がまた出たってよ」相手もケイタイをのぞき込み、「まじかよ。しかも、すぐそこの高層ビルじゃんか」と興奮して騒ぐ。

わたしはテーブル越しに顔を近づける。「聞いた？ この新宿にハムスター小僧が現れたらしいよ」「ああ。それにしたって、高層ビルとはな。逃げ道なんか限られちゃうだろうし、今日あたり、年貢の納め時かもしれねえぞ」「行ってみる？」「わたしがそう聞くと、フンツと鼻を鳴らした。」「決まってんだろっ」

三角ビルの周辺を、幾重にもパトカーが取り囲み、数え切れないほどの警官達が待機している。「こりゃあ、すげえ……」桑田はぼかんと口を開けた。「人混みがすごくて、先へ行けないね。向かいのビルに上ってみようか」「そうしよう」わたし達はガラス張りのような高層ビルに入ると、エレベータに駆け込んだ。「とりあえず、最上階のボタンを押しとくね」とわたし。

わたしと桑田は、あっという間に最上階まで運ばれた。ドアが開くのももどかしく、半開きをこじ開けるようにして転がり出る。「こっち。こっちに窓があるよっ！」「おうっ、そっちか。うひゃあ、めちゃくちゃな高さだなっ！」見下ろすと、人も車もまるで砂粒のよう。

「スカイツリーなんて、これの3倍くらいあるんじゃないか？」わたしは当てずっぽうに言う。
「そんなにかっ?! おれ、スカイツリーなんて上らなくていいや。地上にいるうちは、落っこちる心配なんてしなくてもいいからな」

向かいのビルでは、ヘリコプターが何機も旋回をしていた。それを狙って、ハムスター小僧がマシンガンを手元にぶっ放している。

「あれって、やばくね? こっちまで弾が飛んでくるかもしれねえぞ」桑田が心配そうにわたしを見る。

「大丈夫。ハムスター小僧はそんな人じゃない。きっと、ただの威嚇射撃だよ」そうは言ってみたものの、心の隅では不安だった。

「まあ、当たっちゃったら、運が悪かったってことで、あきらめるとしよう」桑田は三角ビルに向きなおる。

ハムスター小僧の銃撃がパタッと止んだ。一瞬置いて、窓ガラスが粉々に砕けると、スケボーに乗った人物が飛び出してきた。

「無茶だっ!」わたしと桑田は、ほとんど同時にそう叫んだ。あいにく、きれいなユニゾンにはならず、耳障りな不協音が、キーンと余韻を残す。

宙を舞うハムスター小僧は、これでも喰らえとばかりに、奪った札びらを盛大にばらまいた。何千万、いや何億円だろうか。まるで花吹雪のように、ひらひらと落ちていく。

「そこをどいてちょうだいっ!」そう叫びながら、ハムスター小僧がわたしたちのいる窓へと向かってきた。

「よけろーっ」わたしは右へ、桑田は左へと飛び退く。

ガッチャン、という音とともに窓ガラスは微塵になって、白地に茶と黒のぶち模様のレザースーツが飛び込んできた。

まさしく「ハムスター」である。

「ごめんなさいーっ、ケガはしなかったーっ?」そう言いながら、廊下の奥へと走り去っていく現代の義賊。

「見たか、むうにい?」興奮冷めやらず、と言った様子の桑田。それはわたしも同様だった。こくこくとうなずきながら、

「うん、見た。女の人だったね……」

地上は大騒ぎだった。

まんまと逃げられ、悔しがる警官隊。落ちてくる札を夢中になって拾う者、やんやと惜しみのない喝采を贈る者。

「今夜は、どこのテレビ局でも特集を組んで報道するだろうねえ」わたしは言った。

「おれたち、インタビューされまくりだぜ、きっと。早いとこ帰って、もうちょい、ましな格好に着替えてくるか」

「うん、そうしよう。で、インタビューにはなんて答える?」

桑田は片方の眉をきゅっと持ち上げた。

「見たままを言うぜ。何かが飛び込んできて、ビューッと逃げていった。おれが見たのはそれだけだ」

牛丼屋に立ち寄る

駅前ではったり、志茂田ともると出くわす。

「やや、こんなところで会うとは奇遇ですね」志茂田は大げさに驚いてみせる。お互い近所なのだから、別に不思議でも何でもないのだが。

「お昼は食べた？」わたしは腹ペこで仕方がなかった。

「まだですよ。どうです？ その牛丼屋で何か食べませんか。今日は、わたしがおごらせていただきますから」

わたしたちは店に入っていった。

席に着くと、志茂田はメニューも見ずに注文をする。

「わたし、鴨肉牛丼」

「鴨肉牛丼？ それって、鴨肉なの？ それとも牛肉なの？」わたしは不思議に思って、志茂田に尋ねる。

「ははは、むうにい君は面白いことをおっしゃる。もちろん、鴨肉味の牛肉じゃあ、ありませんか。この店の看板ですよ」

聞いたこともなかった。

わたしはメニューをめくったり戻ったりしながら、やっとのことで、

「すいませーん、牛丼の並をお願いしまーす」と声をかける。

「ずいぶんとお悩みだったようですが、その割りにはオーソドックスなものに決めましたね」志茂田が言う。他の人なら皮肉に聞こえるが、これが志茂田の普段の口調なのだった。

志茂田の「鴨肉牛丼」が運ばれてきた。見たところ、普通の牛丼と変わらない。

「それが鴨肉味なの？」わたしはさらに観察してみる。やはり、牛丼だ。

「見た目だけではわからないかもしれませんがね。どうです、一切れ」

わたしは喜んで、肉をつまんで口に入れた。

「あ、ほんとだ。ただの牛肉とは違う。チキン味だねっ」

「いいえ、『鴨』です」志茂田はキッパリと断言する。

わたしの頼んだ牛丼もやって来た。

「お待たせしました」そう言って、店員がカウンターに丼をとんと置く。「こちら、前菜となります」普通の牛丼をオードブルと称して持ってくるなんて、なかなかシャレの効いた牛丼屋だ。

けれど、それは冗談でも何でもなかった。

牛丼を食べ終わると、すぐに店員が器を下げ、代わりにスープを持ってやって来た。その後も、アイスクリーム、サーモンのソテー、フルーツの盛り合わせなど、続々と運ばれてくる。

「ちょっと待って。こんなの頼んでませんけどっ」慌てて店員を呼び止める。

けれど、店員はにこにこ営業スマイルを浮かべながら答えるのだった。

「いいえ、当店ではこれが『牛丼（並）』、380円（税込み）でございます」

「ねえねえ、志茂田。この店って、いつもこうなの？」マンゴーをフォークでつつきながら、わたしはひそひそと話す。

「今日は期間限定で特別サービスなんですよ。でもまあ、『大盛り』を頼まなくて正解でしたね。あれですと満漢全席ですから、今頃は大変なことになっているところでした」

ふう、危なかった。

志茂田にも手伝ってもらい、ようやく全ての料理を片づけることができた。

店員がつかつかとやって来て、わたしと志茂田の間に入る。

「では、食後の結婚식을執り行いますので……」

「えっ?!」わたしは腰を抜かすほど驚いた。

「結婚式ですよ、むうにい君」志茂田がわたしの耳にそっとささやく。

「なんでっ? どうして、志茂田と結婚するのさっ?!」

店員はわたしの言葉などお構いなく、2人の手を固く結ばせる。

「では、こちらへどうぞ」

店員に導かれながら、わたし達は店の奥へと進んでいく。なんだか、もう断りきれない雰囲気だった。

わたしは、ふうっとため息をつき、

「ああ、まさか牛丼屋で結婚式を挙げるなんて」そう、つぶやいた。

週刊 夢の窓 No.8

<http://p.booklog.jp/book/86869>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86869>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86869>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ